



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 夏期一泊見学会の記 : 七月二十二日・二十三日                                                             |
| Author(s)    | 三原, 辰之助                                                                             |
| Citation     | 懐徳. 1978, 48, p. 53-58                                                              |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/90569">https://hdl.handle.net/11094/90569</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 夏期一泊見学会の記

—七月二十二日・二十三日—

## 三原辰之助

今日の好き日を、近江八幡駅に集合、宇野先生以下二十人出迎えの近江バスにて、一路南下して、左折し、田野川を渡ってまず竜王寺に行く。松林におおわれて南北にのびるなだらかな山。竜王山は竜王寺の背後の標高三〇八・八米のさして高い山ではないが心の引かれる山である。雪野山ともよばれる。

奈良時代に創建された雪野寺の跡が山の南麓で発掘されたのは昭和十年で塑像片と風鐸を出土した。代表的なものは京大文学部陳列館に保管する童形首部の塑像は、まことに可憐なもので、我が国、塔基塑像群の代表作の一つである。この遺跡を境内に持つ竜王寺（天台宗）は雪野寺の後継寺院である。門を入ると正面に本堂、右に鐘楼、左に庫裏があり前面に美しい老松が茂って、ささやかであるが美しい境内である。本堂の本尊薬師如来は秘仏で例年旧暦の八月十五日に喘息の「へちま封じ」が執行されてその日に開扉されるが特別に拝観させて頂い

た。

客仏の地藏、観音両菩薩像は平安末期の造像で、左右脇壇の十二神将立像（重文、鎌倉時代）は寄木造玉眼入り極彩色像で、高さ七七糎前後十二体それぞれに変化のある姿態が面白く、頭上に十二支をあらわす鎌倉末期の佳作である。鐘楼には一条天皇御宸筆の「竜寿鐘殿」の額が掲げられ、鐘を本尊として、まつている。

寺伝によると宝龜八年（七七七）この地に住む小野時兼が一人の美女と契をなすこと三年の後、女は平木の沢の主であるといつて玉手箱を形見にのこして去ったが時兼は恋慕にたえず平木の沢に行つたところ女は長十丈ばかりの大蛇の姿であらわれた時兼はびっくりして馳り帰り箱を開くと、鐘があつた。それを雪野寺に寄進した。銅鐘（奈良時代）は高さ一・一九米撞座は龍頭と直角で高い位置につく。龍頭は人目にふれるのをいとうて、白布で包んである。美女の伝説を思いあわせて神秘感がた

だよう。

次に竜王町の盆地の中央にひとときわ大きい森の中にある社殿構成美のととのった苗村神社に参拝する。楼門（重文、室町、応永頃）三間一戸入母屋造。内部の板臺股と虹梁は応永（一三九四—一四二七）ごろの建造というにふさわしい様式である。その奥に拝する中央の社殿は西本殿（国宝）で前室（主屋の前に菱格子で囲うた）付三間社流造、檜皮葺一間の向拝をつける。とくに前室正面の臺股は洗練された美しさである。徳治三年（一三〇八）二月四日造立始め同三月十九日造立の棟札がある。全形も細部も見事に整い。殊に前室（底）の前面と両側に入れた菱格子は中世好みの繊細なものである。本殿向かって左の八幡社本殿（重文室町）は一間社流造、檜皮葺、主屋三面の臺股内の三弁宝珠、桐、牡丹の唐草彫刻がすぐれている。向かって右の日吉社本殿（室町）も簡素だが室町末の建造であろう。

東方の森の野趣にみちる松林の参道の奥に東本殿（重文、室町）が建っている三間社、流造、檜皮葺、向拝の三弁宝珠唐草を彫った臺股は、りっぱだが、全体として、江戸補修部材が目立つ。社務所で宮司さん。宇野先生のお話を承り、昼食をすませます。西本社は国狭くさ槌尊つちみを祭るが昔は神仏混交でそのなごりの本地堂が境内南にあり、厨

子内に安置する不動明王立像（重文、鎌倉）は寄木造、彩色高さ九七糎腰をひねった姿体に変化があり藤原風をのこす鎌倉初期の佳作である。それよりバスに乗り石塔の集落をはづれて気分よい道を行くと、ささやかな寺門のうちには本堂と庫裏がつつましく建つ。

石塔寺（天台宗）に至る。目的の古石塔は山腹にある。門前から一直線にのびる石段を登りつめると、山腹を切り開いた所に数千の小石塔に囲まれて特異な姿の三重石塔（重文、奈良）が立っている。高さ七・一七米、三重石塔として最大で又現存の石層塔としては最古の遺品である。

相輪は後補だが、あとは古いままで各重別石で造った軸部は背が高く梯形をなし、とくに初重は前後二枚石とする。屋根はゆるく、ふくれ軒反りはゆるやかで軒口は斜めに内に切る。各重の通減が大きいため、非常に安定する石塔の姿には大陸的な雄大感がただよう。様式は日本の後世のものとは風格を異にし、大陸中国のものよりも朝鮮百済のものとの細部手法や、つりあいがよく似ている。古くから阿育王塔あゆおうたと称し「源平盛衰記」第七に「近江石塔寺の事」が見え次のような物語が書いてある。

平安時代中ごろ三河守大江定基が出家して寂照法師となり、大唐国に渡り清涼山にまいったところ、寺僧が毎

朝池を回るのを不審に思つてたずねると昔仏生国の阿育王が投げた八万四千基の塔の一つが日本国江州石塔寺にとどまり、朝日が日本に昇る時石塔の影がはるかにこの池にうつるのを礼拝するためであると答えたので寂照は日本にそのことを書き送ったという。さらにそのことが寛弘三年（一〇〇六）に朝聞に達し勅使がこの地に遣はされたが石塔の所在がわからなかったところ狩人の白犬

がこの山頂を教え埋もれていた石塔が掘り出されたという伝説がある。三重石塔の東側の土壇上に五輪塔二基（重文、鎌倉及南北朝）がある。一は嘉元二年（一一三〇）在銘で一・三三米、近江には五輪塔の在銘遺品が少ないので貴重な遺品である。その横に立つ宝塔（重文、鎌倉）は高さ一・六四米しかし相輪は本来のものではない。壇上積式基礎の格狭間三面に開蓮を入れ一面は銘文を刻む。それによつて正安四年（一一三〇）に大工、平景吉が製作したものと知られる。近江石大工で名前のわかるのは、この人だけで犬上郡甲良町西明寺宝塔も同人の作である。松風の首を後にして東近江の平野の東、鈴鹿山系の山なみの麓に古来有名な湖東三山の一つ百済寺（天台宗）に向う。あとの二寺は金剛輪寺と西明寺である。

百済寺は寺伝によると推古天皇十五年（六〇七）に聖

徳太子が創建され、百済から来た僧惠聡、道欣、観勤などが太子の命により住いしたので百済寺と号したという。西大門から参道に入ると両側に老杉が林立し、且つての子院跡の石垣がつづき、重々しい風格が感じられる。やがて本坊があらわれ、それから先三〇〇米ばかりは見事な石段道である。

杉木立と石段道の終るところに仁王門が建ち、その上に本堂がある。しかし元龜の兵火に伽藍は焼失して今の本堂は慶安三年（一六五〇）井伊家により再興されたが、さすがに大きい建物である。内陣厨子に奉安する本尊の秘仏十一面観音立像（藤原）は高さ二・五八米一木彫りのりっぱな藤原初期の古仏でだいぶ風化、損傷がある。

宇野先生御存知の住職の好意により、本坊の拝観を許される。広間に安置される金銅弥勒半跏像（鎌倉）は高さ二七糎飛鳥、白鳳時代に多い形式だが鎌倉時代に古いものを模したものと思われる。仏間の前室壁に掲げられる木製絵馬二面（桃山）は巾一・一米前後で白と黒の馬の図を一对とし天正十七年（一五八九）に百済寺本堂に施入という墨書があり、桃山様式の馬の表現が見事である。塔趾は本堂斜め上方の山中に礎石を残している。塔趾より出土した鎮壇具納入壺は古信樂の南北朝頃に作られたものである。この他では日吉山王神画（鎌倉）黒漆輪宝

壽経函（室町）唐草文磐（平安）鑄鉞（建長八年在銘）三十六歌仙屏風（桃山）等見るべきものである。

書院前面には最近豪華な池庭が作られた。土地の花崗岩の巨石を用いて山畔に多くの石組を作り、池中に中島を設けて清新の感がある。百濟寺から名神高速道路を通過って同じ地名にある今夜の宿泊地、近江温泉湖東ホテルに至る。同温泉は四国道後温泉に最適する三十二度の天然温泉が湧いてわかしている。感じのよい景観、温泉気持ちよかった。夕食は当ホテル名物の湖東鍋をつついて賑やかに歓談した。

翌朝迎えに来た近江バスにて、金剛輪寺（天台宗）に向う総門から子院跡の石垣の間に折れ曲つてのびる石畳の道は両側のつつじの低い刈り込みが長くつづいてこの寺の参道は他の二山の男性的な荒々しさにくらべて、やさしく感じられる。本坊をすぎてからはこども樹林の中の荒い石段道になり本坊から伽藍までの距離は三山中で一番長い。全山楓樹が多く紅葉の秋はことに美しく青葉の時もそれにおとらず清々しいことであろう。天平十三年に行基菩薩が開創し、聖武天皇が勅願寺とされたと伝え、いまも伽藍の本堂を「天平大悲閣」とよんでいる。平安初期嘉祥年間（八四八〜五〇）に叡山の慈覚大師円仁が来て天台の道場として以来、天台宗になったという。

石段道は二天門が石段の上にあらわれる所でようやく終る門内すぐ正面に大きい本堂（国宝鎌倉）が姿を見せる。天台宗特有の仏堂様式を備えた鎌倉時代の代表的な遺構だ。弘安十一年（一二八八）近江の守護佐々木頼綱が大施主となって建立された。七間に七間、入母屋造、檜皮葺である上に正面建具が葺戸なので宮室風な優雅さがある。向拝がなく正面観はすっきりしている。内部では外陣を広くとり内陣との境は吹寄菱格子の欄間と格子戸とする。中央の欄間に鏝口をかけるために複弁蓮弁をめぐらした円窓を造る。

厨子内には秘仏の本尊聖観音を奉安し、厨子をはさんで両脇侍の不動明王、毘沙門天立像（重文、鎌倉）が立つ不動明王像は建暦元年（一一二一）に造られ、うち毘沙門天は仏師源守永の作になる。また本尊の護法像四天王（重文）は翌年の建暦二年に作られた。客仏阿弥陀如来像（重文）は貞応元年（一一二二）円派仏師である経円がつくり、十三世紀前半期の円派仏師の作風を知る貴重な彫像である。このほかに慈覚大師像二軀（重文）があり銘記によると一軀は弘安九年（一二八六）一軀は正応元年（一二八八）の年記があつて、ともに蓮妙が慈恵大師六十六軀造立の発願をなしその内の二軀であることが判る。無年記の彫刻で重文のものでは大黒天像（平安）

阿弥陀如来像（平安）十一面観音像（平安）の三軀がある。

本堂の左方山腹に三重塔（重文、鎌倉）は寛元四年（一二四六）の建立で、永く荒類して初層、中層の軸部だけとなっていたが三ヶ年の工事で本年完形に復原された。二天門は（重文）室町末期のものである。工芸品には重文の銅磬（鎌倉）重文の梵鐘、高さ一・四二米鎌倉らしい引しまった形を示し乾元二年（一三〇三）に造られ大工河内国丹南郡黒山郷の河内助安の作である。本坊はもとの明寿院で書院南から東にかけての庭園（桃山）は見るべきものがある。南庭は山畔から出島にかけて豪華に石組と刈りこみを配した池庭でその中に宝篋印塔（鎌倉）が立っている。東庭は高く滝石組を作りその下に池をうがっ、総体に桃山風だが江戸の改修を受けている。南庭の中門内に立つ下馬板碑（鎌倉）も珍らしい古遺品である。昼食は寺の座敷で近江温泉で作った弁当をたべる。宇野先生より現場その他で懇切な御話を受け、時間に余裕があったので、ゆっくりりさして貰った。

次は湖東町の押立神社に参拝する祭神は火産靈神、伊邪那美の神で大きい森が美しく参道は広々としている。湖東町の中心をなす神社である。本殿（重文）は三間社流造、檜皮葺で棟札に応安六年（一三七三）の年記があ

り、神門である大門（重文）は四脚門形式で入母屋造檜皮葺、左右の切妻造の脇門は指定になっていないが三つ門で安定した構成を示している。近文二年（一三五七）ともに南北朝時代の建物である。社宝には鬼面が伝えられている。面裏に「天文二十歳辛亥三月 日賢徳作」と朱銘があり、天文二十年（一五五一）賢徳によって打たれたことが判る。鬼面は般若面に似た二角を頭頂につけ、額、両眼下、両眼の間に深い皺を多く刻み、目、鼻先は異形で両側に張出した耳など、のちに現われてくる鬼とは異色な仮面で、賢徳の作例は他に見ない。

次に押立神社から南横溝集落の西方にある善明寺（臨濟宗）は、もと天台の寺で収蔵庫には丈六の阿弥陀如来坐像（重文、藤原）は高さ二・七三米寄木造、漆箔、定印を結ぶ巨像で裳懸座上に坐し典型的な藤原後期の秀作である。向って左脇壇に安置の釈迦如来坐像（重文、藤原）は一・四五米同じく裳懸座上にすわり寄木造、漆箔、温雅な藤原様式を示し胎内墨書銘によると仏師は河内講師僧快俊で長承二年（一一三三）十月一日御衣木山入をなし同年十一月二十日造立を終わったと記しているから、約五十日で仏師快俊が造像を行ったことが知られる。

近江に藤原時代の如来座像が多いが造立銘のあるものは至って少ないので資料的にも重要な像である。尚像内

前面に長文の造像銘記があつて多くの結縁交名が記される。その交名中に土地の豪族である依智秦一族の妻女の名が多く見られて、依智秦氏族が十二世紀にもなお強く湖東に力を持ちその妻女の生家の氏名が記されているから、どのような氏族との縁組が行われたかも判り平安後期の在地豪族の消長が窺れる好史料としても興味がもたれる。これにて見学は終りバスは近江八幡駅に引き返しそれぞれ帰路につく。